SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

児童養護施設中学生の時間的展望と自尊感情：有効な自立支援をおこなうために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井出, 智博, 片山, 由季, 大内, 雅子, 堀, 遼一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007851

児童養護施設中学生の時間的展望と自尊感情

－有効な自立支援をおこなうために－

The Time Perspective and Self-esteem of Junior High School Student Living in Children's Home

－For Effective Self-reliance Support－

井　出　智　博・片　山　由　季[1]・大　内　雅　子[2]・堀　　遼　一[3]

Tomohiro IDE，Yuki KATAYAMA，Masako OUCHI，Ryoichi HORI

（平成 25 年 10 月 3 日受理）

The purpose of this study was to clarify the aspect and relation of time perspective and self-esteem of junior high school students living in children's home. Junior high school students in children's home（N=43 boys, 35 girls）and those living in parent house（N=292 boys, 285 girls）as control group, were completed questionnaires. The following aspects and relation of the students in children's home ware analyzed:（a）the self-esteem of girls in children's home were lower than others,（b）students in children's home have strong emptiness and girls couldn't have positive perspective of future,（c）the factors which raises self-esteem of students in children's home were positive perspective of future, and emptiness for girls. The present findings suggest that, in self-reliance support for junior high school students in children's home, it is important not only retrospective approach but also providing fulfilling dairy life and psychological support which they can have the positive perspective of future.

Ⅰ　問題と目的

山縣（1989）が示しているように，児童養護施設（以下，施設）における子どもへの自立支援は子どもたちの日々の生活の中でおこなわれる“in care”と退所後におこなわれる“after care”，さらに，その双方の領域に重なって位置する“in care”の終末期と“after care”開始期における支援を指す“leaving care”によって進められる。つまり，自立支援は卒園，退園を目前に控えた中学3年や高校3年次にのみおこなわれるものではなく，日々の生活支援からの連続線上に位置する支援課題といえる。しかし，実際には多くの施設では日々の子どもの生活を支援することに手いっぱいで，卒園や退園，さらにその後の生活を見据えた自立支援を“in care”の中でおこなっていくことは非常に困難な状況にあり，中学3年や高校3年といった卒園，退園を目前に控えた時期に就労支援や一人暮らしをする準備としての生活支援のような形で進められている。こうした中で自立援助ホームの整備など制度的な整備や施設児童の自立支援に取り

[1] 児童養護施設　春光学園　心理職

[2] 児童養護施設　聖母愛児園　心理職

[3] Accenture in Japan

組むNPOや就労支援をおこなう会社の設立など社会資源の整備も少しずつではあるが進みつつあることはわずかな光明と言えるのかもしれない。しかし，畠山（2002）が施設児童にとっての自立は発達上の自然な過程ではなく，すでに法律上で決められた「期限切れ」であるという点が一般家庭の子どもとの違いであると指摘している。そうした中で，児童養護施設で暮らす子どもにとっての自立が「期限切れ」とならないように十分な支援をおこなっていく必要があるが，実現には程遠い現状にある。

一方，施設に心理職が配置されて15年近くが経過し，心理職による実践や研究の報告も豊富になってきたが，心理的支援という視点から自立支援を捉えようとする実践や研究の報告は見られない。特に時間的展望という概念は発達心理学や教育心理学の分野において大きな研究のテーマであり，発達的変化や動機づけなどとの関連や非行やうつ病などの臨床心理学的問題との関連など幅広い研究がおこなわれてきた（都筑ら，2007）。時間的展望と自立やキャリアの発達などの視点からの研究に目を向けると白井（1997）は大学生の職業選択行動を時間的展望の様相に関連があることを指摘し，南ら（2011）は中学生に対しても時間的展望の側面から進路指導をおこなうこと必要性を指摘している，また，下村（2007）らはフリーターの支援を通して，時間的展望の視点を取り入れたキャリア発達理論の構築が必要であると指摘するとともに，対象がどのような時間的指向性を持っているかによって有効なキャリア支援のアプローチが異なることを指摘している。先述したとおり，自立支援が重要な課題となる施設では子どもたちの時間的展望の状態に応じた自立支援が求められるが，施設児童の時間的展望についての調査は小学生を対象とした飛永ら（2005）によるものだけである。そこで，特に，本稿では高校進学か就労かの大きな岐路に立たされる施設で暮らす中学生に対する効果的な自立支援をおこなうための基礎資料として，施設で暮らす中学生の時間的展望の様相を明らかにすることを目的とした。また，時間的展望と多くの適応の指標との関連が検討されおり，植村ら（2003）は肯定的な時間的展望を持つ中学生は自尊感情も高いことを示している。本研究においても時間的展望の様相と共に，施設の子どもたちの自尊感情との関連について検討する。なお，以下，本研究では特に断りのない場合，施設児童は施設で暮らす中学生を指すこととする。

Ⅱ　方法

1.対象

施設群として2県に所在する施設（7施設）に入所中の中学生78名を対象とし，家庭群として2県に所在する中学校（2校）に在籍する中学生580名を対象とし，そのうち欠損値のあるデータを除いた578名を分析対象とした。対象の内訳をTable.1に示す。

Table.1 対象者内訳

学年	性別	群 家庭	群 施設	合計
1	男	104	19	123
	女	111	9	120
2	男	89	12	101
	女	89	14	103
3	男	99	12	111
	女	85	12	97
全体	男	292	43	335
	女	285	35	320
	合計	577	78	655

2. 調査時期と手続

調査は2012年12月から2013年7月である。施設群については各施設の心理職を窓口にして子どもたちへの調査を依頼し，家庭群はそれぞれの中学校に郵送し，ホームルームなどで実施してもらった。

3. 調査内容

(1) 時間的展望に関する尺度

時間的展望を測定する尺度として「将来への希望」「将来への志向性」「空虚感」「計画性」「将来目標の渇望」の5つの因子からなる都筑（2006）による中学生用の時間的展望尺度（4件法）を使用した。中学生を対象年齢に含む時間的展望を測定する尺度には杉山（1994；時間的展望質問紙）や白井（1997；時間的展望体験尺度）などもあるが，過酷な過去を生きてきた経験を持つ施設児童にとって，杉山，白井の尺度に含まれるような過去の捉え方や志向性を尋ねるような項目が含まれていることは心理的負担が大きいことを鑑み，都筑による時間的展望尺度を用いることとした。

(2) 自尊感情に関する尺度

自尊感情を測定する尺度として桜井（1992・堀，2007）が作成した児童用コンピテンス尺度，4因子のうち，「自己価値」因子を用いた。児童用コンピテンス尺度はHarter（1982）の領域別コンピテンス尺度とその日本語版（桜井，1983）を参考に，児童が反応しやすいように改善した40項目（4因子）からなる尺度である。そのうち「自己価値」因子は従来の自尊感情を測定する項目として位置づけられており（桜井，1992），対象となる施設児童の読解力，理解力を考慮すると小学校高学年を対象とした児童用コンピテンス尺度の「自己価値」因子を本研究における自尊感情に関する尺度として用いることが適当であると考えた。

(3) 施設群の属性

施設群，家庭群ともに学年，性別を回答者の属性に関するデータとして本人に記入を求めた。また，施設群については，施設職員にそれぞれの子どもについて虐待経験の有無，在園年数に関するデータを提供してもらった。

4. 倫理的配慮

時間的展望について尋ねることは施設児童にとって，過去の経験を思い出したり，将来を考え不安な気持ちになったりする可能性もあると考え，調査の実施は基本的に心理職に依頼した。また，先述したとおり，調査用紙の選定する際にも施設心理職2名に調査用紙を見てもらい，内容の確認をしてもらった。

Ⅲ　結果

1. 因子分析の結果

(1) 時間的展望尺度

時間的展望尺度22項目のうち，天井効果が見られた項目を除去した21項目について，都筑（2006）の先行研究に従って主因子法・プロマックス回転，5因子で因子分析を実施した。因子負荷量が0.35に満たないものを除去し，再び同じ条件で因子分析をおこなった結果，おおむね都筑の結果と同様の結果が得られた（Table.2）。質問項目の減少はあるが，基本的な因子構造には変化がなかったため，「将来への希望」「計画性」「将来への志向性」「将来目標の渇望」「空虚感」という因子名を採用した。また，それぞれの因子について，α 係数を算出したところ，

0.70～0.83と十分な内的一貫性が確認されたために，各因子の項目平均値を算出し，各得点を作成した。「将来への希望」は「自分の将来を自分の力で切り開く自信がある」「どんな困難が生じても，将来うまくやっていく自信がある」などを含む5項目から構成され，将来への肯定的な意識を表しているという共通性を持つ因子である。「計画性」は「私は計画に従ってすばやくものごとを進めている」「何かをやる時は時間ぎりぎりになってから急いでやる方だ（逆転項目）」などを含む5項目から構成され，計画の立案や実行に関する内容を含む因子である。

Table.2 因子分析の結果

	F1	F2	F3	F4	F5	N	平均	SD
【時間的展望尺度】								
第1因子：将来への希望								
どんな困難が生じても，将来うまくやっていく自信がある	.861	−.035	.048	−.063	.093	656	2.69	0.84
自分の将来を自分の力で切り開く自信がある	.827	−.019	−.009	−.073	.064	657	2.79	0.86
私のこれから先の将来は明るいと思う	.678	−.006	.023	.048	−.157	652	2.90	0.84
自分の将来は，自分の力で思いどおりにできる	.600	.053	.050	.028	.022	655	2.44	0.87
私は自分の将来に希望をもっている	.571	.042	−.138	.094	−.101	656	3.05	0.90
第2因子：計画性								
私は計画にしたがってすばやく物事を進めている	.082	−.675	.061	.068	.152	654	2.04	0.83
私は計画を立てずに，なりゆきにまかせて進める方だ	.159	.651	.121	.044	.031	655	2.72	0.98
勉強しろと言われなくても，自分で計画を立てて勉強する	.154	−.573	.031	.069	.105	653	2.14	0.91
何かをやるときには時間ぎりぎりになってから急いでやる方だ	.139	.555	.018	.026	.164	655	2.78	0.97
いつまでにやりなさいと決められていないといつまでもやらない	−.090	.397	−.019	.043	.225	653	2.31	1.00
第3因子：将来への志向性								
私は遠い将来のことはあまり考えない	.077	.004	.824	−.033	−.052	650	2.49	1.06
私はこれから先のことはあまり考えない方だ	.022	.022	.766	.000	.005	654	2.25	1.00
私の将来は，ぼんやりとしていてはっきりわからない	−.223	.004	.488	.116	.088	656	2.37	0.99
第4因子：将来目標の渇望								
自分の将来の見通しがほしい	−.012	.037	−.040	.914	.009	654	2.97	0.95
私は自分の将来計画をもちたい	.075	−.011	−.150	.647	.017	652	2.98	0.98
私は早く将来の夢を見つけたい	−.071	−.073	.207	.527	−.042	651	2.83	1.10
第5因子：空虚感								
毎日がむなしいと思うことがある	−.027	−.050	−.074	−.035	.802	653	2.01	1.01
毎日が同じことのくり返しばかりで退屈だ	−.023	.049	−.031	−.047	.701	655	2.28	1.04
毎日がなんとなく過ぎていくように感じる	.049	−.004	.113	.072	.490	655	2.70	0.97
【自尊感情尺度】								
自分に，自信がありますか	.716					652	2.29	.937
自分には，人にじまんできるところがたくさんあると思いますか	.685					653	2.21	.914
たいていのことは，人よりうまくできると思いますか	.639					652	2.10	.836
自分には，あまりいいところがないと思いますか	−.618					650	2.52	.924
何をやってもうまくいかないような気がしますか	−.585					652	2.41	.902
自分はきっとえらい人になれると思いますか	.540					654	1.82	.807
自分は，あまり役に立たない人間だと思いますか	−.492					652	2.39	.893
今の自分に，まんぞくしていますか	.488					653	2.21	.931
自分の意見は，自信をもって言えますか	.416					652	2.41	.948
しっぱいをするのではないかと，いつもしんぱいですか	−.387					653	2.78	.990

因子・尺度間相関	時間的展望尺度 F1	F2	F3	F4	F5	自尊感情尺度
F1	−	−.202	−.321	.128	−.207	.531
F2		−	.255	−.169	.227	−.295
F3			−	−.106	.183	−.180
F4				−	−.036	.072
F5					−	−.358
自尊感情尺度						−
各因子・尺度のα係数	0.83	0.71	0.73	0.71	0.70	0.82

「将来への志向性」は「私は遠い将来のことはあまり考えない」「私はこれから先のことはあまり考えない方だ（逆転項目）」など3項目から構成され，将来について考えるかどうかを表す内容を含む因子である。「将来目標の渇望」は「自分の将来の見通しがほしい」「私は早く将来の夢を見つけたい」など3項目から構成され，将来目標への動機づけを含む因子である。「空虚感」は「毎日がむなしいと思うことがある」「毎日が同じことのくり返しばかりで退屈だ」など3項目から構成され，空虚な感情を表す内容を含む因子である。

(2) 自尊感情

自尊感情尺度10項目について主因子法・プロマックス回転，1因子で因子分析を実施した。その結果，因子負荷量が0.35に満たない項目はなかった（Table.2）。また，α係数を算出したところ，0.82と十分な内的一貫性が確認されたため，本研究における自尊感情尺度として尺度の平均値を算出し，自尊感情得点を作成した。自尊感情尺度は「自分に，自信がありますか」「たいていのことは，人よりうまくできると思いますか」「今の自分に，まんぞくしていますか」など10項目から構成されている。

2. 施設群，家庭群の比較

時間的展望尺度の各因子得点および，自尊感情得点について，施設群と家庭群（所属），性別による差異を検討するために，2要因の分散分析をおこなった（Table.3）。「将来への希望」因子では所属と性別の交互作用が有意で，施設群の女子の得点が家庭群の男女，施設の男子と比較すると低く，将来に対する希望が乏しい傾向にあった。また，「空虚感」因子では所属の主効果が有意で，家庭群よりも施設群の得点が高く，家庭群より施設群の空虚感が強い傾向にあることが明らかになった。さらに，自尊感情得点では，所属と性別の交互作用が有意で，施設群の女子の得点が家庭群の男女，施設の男子と比較すると低い傾向にあることが示された。

3. 施設群内における比較

施設群の時間的展望尺度の因子得点について，虐待の有無と性別による差異を検討するために，2要因の分散分析をおこなった（Table.4）。「将来への希望」因子では虐待の有無と性別の主効果が有意で，虐待無群の得点が虐待有群の得点より高く，女子より男子の方が得点が高い傾向にあった。その他の因子では虐待の有無，性別によって得点に際は見られなかった。また，自尊感情得点では性別の主効果が有意で，男子よりも女子の方が得点が低かった。

4. 時間的展望と自尊感情の関連について

所属，性別の各群において時間的展望の様相が自尊感情に及ぼす影響について検討した。時間的展望尺度の各下位因子得点が自尊感情得点をどの程度予測しうるかを調べるために，自尊感情得点を従属変数，時間的展望尺度の5つの因子を独立変数とする重回帰分析（強制投入法）をおこなった（Table.5）。その結果，男女ともに家庭群に比べて，施設群では決定係数が小さかった。標準偏回帰係数については，家庭群では男女ともに「将来への希望」「計画性」「空虚感」が有意で，特に男女ともに「将来への希望」が大きな値を示し，女子では加えて「空虚感」も大きな値を示した。一方，施設群では家庭群と同様に「将来への希望」は男女ともに有意であったが，男子ではその他の項目は有意ではなく，女子は「空虚感」のみ有意であった。女子は「空虚感」が最も大きな値を示した。

Table.3 施設群と家庭群の比較

	N		時間的展望尺度											
			将来への希望				計画性				将来への志向性			
	家庭群	施設群	家庭群		施設群		家庭群		施設群		家庭群		施設群	
男子	292	43	2.82	*0.67*	2.86	*0.74*	2.76	*0.63*	2.79	*0.76*	2.42	*0.86*	2.38	*0.87*
女子	285	35	2.79	*0.60*	2.11	*0.74*	2.70	*0.62*	2.71	*0.75*	2.33	*0.77*	2.26	*0.81*
					F値	p値			F値	p値			F値	p値
		所属			16.384	<.000			.056	.813			.327	.568
		性別			24.880	<.000			.761	.383			1.050	.306
		所属＊性別			20.801	<.000			.024	.876			.016	.900

時間的展望尺度								自尊感情尺度			
将来目標の渇望				空虚感							
家庭群		施設群		家庭群		施設群		家庭群		施設群	
2.93	*0.82*	2.83	*0.87*	2.34	*0.79*	2.71	*0.96*	2.43	*0.54*	2.35	*0.57*
2.97	*0.75*	2.70	*0.92*	2.24	*0.75*	2.46	*0.79*	2.20	*0.53*	1.84	*0.53*
		F値	p値			F値	p値			F値	p値
		3.540	.060			9.510	.002			10.566	.001
		.155	.694			3.356	.067			31.224	<.000
		.791	.374			.710	.400			4.365	.037

Table.4 施設群における虐待の有無による比較

	N		時間的展望尺度											
			将来への希望				計画性				将来への志向性			
	虐待有	虐待無	虐待有		虐待無		虐待有		虐待無		虐待有		虐待無	
男子	35	11	2.66	*0.68*	3.33	*0.71*	2.78	*0.72*	2.78	*0.88*	2.28	*0.88*	2.52	*0.86*
女子	26	15	1.96	*0.82*	2.55	*0.44*	2.76	*0.71*	2.67	*0.76*	2.43	*0.78*	2.20	*0.91*
					F値	p値			F値	p値			F値	p値
		虐待群			14.295	<.000			0.071	0.791			0.001	0.976
		性別			20.106	<.000			0.151	0.698			0.164	0.686
		虐待群＊性別			0.058	0.81			0.068	0.795			1.314	0.255

時間的展望尺度								自尊感情尺度			
将来目標の渇望				空虚感							
虐待有		虐待無		虐待有		虐待無		虐待有		虐待無	
2.79	*0.89*	2.91	*0.75*	2.58	*0.82*	3.20	*0.89*	2.26	*0.30*	2.55	*0.43*
2.60	*0.78*	2.91	*1.03*	2.51	*0.94*	2.47	*0.77*	2.15	*0.30*	2.16	*0.32*
		F値	p値			F値	p値			F値	p値
		1.073	0.303			1.855	0.177			3.483	0.066
		0.203	0.653			2.520	0.116			9.946	0.002
		0.212	0.646			3.549	0.063			3.327	0.072

Table.5 各群における時間的展望尺度下位因子の標準偏回帰係数

群	性別	時間的展望尺度	自尊感情 R^2	自尊感情 β
家庭群	男子	将来への希望	0.34 ***	.472 ***
		計画性		−.187 **
		将来への志向性		.035
		将来目標の渇望		−.007
		空虚感		−.171 **
	女子	将来への希望	0.39 ***	.367 ***
		計画性		−.192 **
		将来への志向性		.017
		将来目標の渇望		−.031
		空虚感		−.323 ***

群	性別	時間的展望尺度	自尊感情 R^2	自尊感情 β
施設群	男子	将来への希望	0.26 **	.354 *
		計画性		−.308
		将来への志向性		−.142
		将来目標の渇望		−.156
		空虚感		−.120
	女子	将来への希望	0.26 *	.336 *
		計画性		−.017
		将来への志向性		.094
		将来目標の渇望		.223
		空虚感		−.460 *

Ⅳ　考察

1. 児童養護施設児童の自尊感情

施設児童は自尊感情が低いことは多くの研究者，実践者によって事例研究的に指摘されてきたが，複数の施設において十分な人数の対象者に対しておこなわれた実証研究は見られない。本研究で明らかになったのは，男子は家庭の子どもと変わりないが，女子は家庭の男女や施設の男子よりも自尊感情が低いということである。また，虐待経験の有無が自尊感情の様相に影響を与えていると考えたが，Table.4に示したように虐待経験の有無によって差異は見られなかった。戸松（2005）は虐待経験の有無や入所時期などの要因によって気質に違いは見られないが，性別によって違いがみられることを明らかにしている。本研究に見られたように，同じ施設児童にもかかわらず，なぜ男子は家庭児童と差異がなく，女子児童にのみ差異がみられたかについての明確な理由を本研究の結果から特定することは困難であるが，性的虐待を受けた女子と低い自尊感情の関連を指摘する研究（Oates，1985・Brown et al.，1986・Stern et al.，2006他）が多くみられることからは，施設の女子の中に性的虐待を受けた女子が含まれている影響があるかもしれないということが1つの仮説として考えられる。本研究では施設児童について被虐待経験の有無によって自尊感情に差異がみられるかについての検討をおこなったが，今後の課題として，虐待の種別によって差異がみられるかについての検討をおこなう必要がある。施設児童の心理的ケアにおいては被虐待経験に着目したものが多くみられるが，先行研究や本研究の結果からは，被虐待経験の有無よりもむしろ，性別に配慮した支援が必要であることが示唆された。

2. 児童養護施設児童の時間的展望

施設児童の時間的展望に関する研究はこれまでに飛永ら（2005）を除いて全くおこなわれておらず，本研究でその様相が初めて明らかになった。家庭の中学生と比較すると施設児童は空虚感が強いという結果が得られた。空虚感は現在の生活に対する空しさや退屈さを示すもので，施設児童は家庭の中学生に比べ日々の生活を生き生きと過ごすことができていないと感じているといえる。また，施設の女子は家庭の男女，施設の男子に比べ，将来への肯定的な意識（将来への希望）が持てていないことが明らかになった。施設で暮らす女子は将来に対して否定的なイメージを抱いている，あるいは将来をイメージすることすら難しい状態にあると考えられる。被虐待児とそうでない子どもの心理的特性の比較研究において，被虐待児はそうでない子どもに比べて，希望や意欲が低いことが示されている（Oates,R,K.,1985）。本研究で明らかになった施設で暮らす被虐待児の空虚感が高く，将来への希望が持ちにくいという特徴は，海外の先行研究でも示された毎日の生活を意欲的に生きることや将来に対する希望が薄いことを支持する結果であったといえる。同じ施設に暮らす子どもであっても被虐待経験を持つ児童とそうでない児童への支援，特に自立支援において心理面から支援をおこなう場合には，児童の持つ成育歴に配慮しながら支援をおこなうことが必要であるということが示唆された。

3. 家庭児童と施設児童の自尊感情と時間的展望の関係性についての差異

家庭児童と施設児童の男女各群において時間的展望尺度の各因子が自尊感情に影響を与えているのかを重回帰分析で検討したところ，家庭児童と施設児童では決定係数や有意な標準偏回帰係数にばらつきがみられた。家庭児童と比較しながら施設児童にとってどのような時間的展望の様相が自尊感情の向上に効果を持つ可能性があるのかを検討したい。

家庭群，施設群の男女すべてにおいて，将来への肯定的な意識（将来への希望）を持てるよ

うになることが自尊感情の向上に重要な役割を持っていることが示された。また，家庭群では空しさや退屈さ（空虚感）を低減することや計画を立てたり，計画に従って実行すること（計画性）に縛られないことが自尊感情の向上に重要な役割を担っていることも示され，特に女子では空しさや退屈さ（空虚感）を低減することが強い影響を与えていることが明らかになった。一方，施設群に目を向けると，家庭と同様に女子では空しさや退屈さ（空虚感）を低減することが自尊感情の向上に重要な役割を担っているが男子は将来への肯定的な意識（将来への希望）を持てるようになることのみが影響しているという結果になっている。家庭児童では施設児童に比べて，時間的展望が自尊感情に与える影響が大きく，将来への希望を高めたり，空虚感を弱めたり，計画的に縛られすぎないように自立支援を進めることが自尊感情を向上させる可能性を持つ支援となることが示された。また，男女において，若干の傾向の違いは見られるものの大差はなく，男女共に同じような時間的展望を持てるような自立支援をおこなえばよいことが示唆された。

一方，施設において時間的展望の観点から自尊感情を向上させる取り組みを進める際には，男子に対しては将来への肯定的な意識（将来への希望）を持てるようになる支援をおこなうこと，女子に対しては加えて，現在感じている空しさや退屈さ（空虚感）を低減するような支援をおこなうことが必要であることが示唆された。施設の小学生に対する調査をおこなった飛永ら（2005）は施設で暮らす子どもたちへの援助の視点として，過去ばかりではなく現在や未来に焦点をあてることが有効である可能性がある，と指摘しているが，空虚感と将来への希望はそれぞれ現在と将来に対する充実を意味する指標であると考えられることから本研究の結果は飛永らの指摘を支持する結果であり，現在の生活の充実と将来への希望を醸成するような支援が必要であることを示唆しているといえる。しかし，家庭児童と比較すると，肯定的な時間的展望の醸成だけが，自尊感情を高めることにはつながらないことも示唆された。本研究では施設児童の心理的負担に考慮し，過去に関する時間的展望についての質問項目を調査に加えることを控えたが，施設児童の心理を考えると過去に関する時間的展望と自尊感情の関連を明らかにする必要もあると考えられる。今後，倫理面に配慮しながら実施可能な調査の在り方を模索する必要がある。

4. 児童養護施設中学生に対する効果的な目立支援にむけて

自尊感情と時間的展望の関係性を検討することによって，男子に対しては将来への肯定的な意識（将来への希望）を持てるようになる支援をおこなうこと，女子に対しては将来への肯定的な意識（将来への希望）を持てるようになる支援に加えて，現在感じている空しさや退屈さ（空虚感）を低減するような支援をおこなうことが適切であることが示唆された。ここでは，児童養護施設においておこなうことができる，そうした具体的な支援について考えてみたい。これまで施設における心理的支援は，施設に心理職が配置された理由に象徴されるように，主に虐待を受けた子どものトラウマのケアの視点から進められ，実際に多くの実践が報告されている（例えば羽生，2009他）。また，虐待とも関連するが愛着を巡る問題も重要な課題と位置づけられ，これも多くの実践が報告されている（例えば下笠，2004他）。さらに，最も重視すべき支援のアプローチとして，生活臨床が挙げられる。生活臨床とは日々の様々な生活場面を通じておこなわれる子どもの回復と育ちのための様々な手立ての事であり，トラウマや愛着に焦点化したケアを子どもたちの“過去”に焦点を当てたケアだとすると，“現在”に焦点を当てたケアと位置づけることができる。さらに，これに従えば“将来”へのケアに該当するのは自

立支援ということになるだろう。しかし，心理的なケアの視点から施設において自立支援やキャリア・カウンセリングを論じた先行研究は見当たらない。特に，筆者の施設での現場経験に基づいて想起すると，施設における年長児に対する自立支援は，施設の慢性的なマンパワーの不足もあって，高校を卒業する時期が近づいて，ほとんど就労支援と同じような意味合いでおこなわれていた。全国的な施設における自立支援に関する実践のレビューが必要であるが，多くの施設で，自立支援が就労支援に終始し，心理面からの十分なアプローチがおこなわれていないものと考えられる。

本研究で得られた知見によると，空しさや退屈さ（空虚感）を低減すること，つまり子どもたちが毎日を生き生きと過ごすことができるような生活を提供することや将来への肯定的な意識（将来への希望）を持てるようになることが自尊感情を向上させ，施設で暮らす子どもたちの成長につながる可能性がある。日々の生活の充実については，先述した生活臨床の枠組みの中で，子どもたちの様々な問題に対処するだけではなく，子どもが生き生きと日々を過ごせるような生活環境やライフイベント（施設の行事だけではなく，子どもが毎日の生活を充実していると感じることができるような日課の組み方），職員との関係性，子ども同士の関係性を作り出していくことが必要である。また，自立支援においては，就労支援やソーシャルスキルの習得だけではなく，子どもたちが自らの将来を豊かに思い描き，希望を持つことができるような将来に向けた心理的な自立支援も必要であると考えられる。今後の課題としては，施設における自立支援において，心理職がどのような役割を果たすか，あるいは，施設児童の心理面に着目しながら自立支援を進めるような実践の構築が求められる。さらに，本研究では中学生を対象としたが，高校生を対象にした調査や中学から高校にかけての縦断的研究も求められるところである。

引用文献

Browne A, Finkelhor D.（1986）Impact of child sexual abuse: A review of the research, *Psychological Bulletin*，99(1)，66-77.

羽生真規子（2009）児童養護施設における愛着障害及びトラウマ反応を生じた被虐待児童への取り組み--ケアワーカーとセラピストの連携を中心に，おおみか教育研究，12，45-57.

Harter,S.（1982）The perceived competence scale for children，*Child Development*，53，87-97.

畠山由佳子（2002）児童養護施設の自立支援プログラムに対する評価測定，関西学院大学社会学部紀要，91，137-148.

堀洋道（2007）心理測定尺度集Ⅳ，サイエンス社，22-27.

南 雅則・浅川潔司・岸野葵（2011）時間的展望と中学生の進路意識および学校適応感に関する研究，学校教育学研究，23，9-15.

Oates RK, Forrest D, Peacock A.（1985）Self-esteem of abused children，*Child Abuse & Neglect*，9(2)，159-163.

下笠幸信（2004）被虐待児のプレイセラピーにおける攻撃と依存：児童養護施設Cでの事例を通して，臨床教育心理学研究，30(1)，71-80.

下村英雄・白井利明・川崎友嗣・若松養亮・安達智子（2007）フリーターのキャリア自立：時間的展望の視点によるキャリア発達理論の再構築に向けて，青年心理学研究，19，1-19.

白井利明(1997)時間的展望の生涯発達心理学.

Stern AE, Lynch DL, Oates RK, O'Toole BI, Cooney G. (2006) Self Esteem, Depression, Behavior and Family Functioning in Sexually Abused Children, *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 36(6), 1077-1089.

杉山成(1994)中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性, 教育心理学研究, 42, 415-420.

飛永佳代・針塚進(2005)児童養護施設入所児童の「現在の自己評価」と「未来への希望」との関連性, 6, 181-188.

戸松玲子(2003)児童養護施設で生活する子どもの気質研究 : 3〜7歳児を中心として, 甲南女子大学大学院論集人間科学研究編, 創刊号, 85-95.

都筑学 (2006) 中学生における自己意識の発達 :「自己」の肯定的な側面と否定的な側面との関係, 教育学論集, 48, 363-377.

都筑学・白井利明(2007)時間的展望ハンドブック, ナカニシヤ出版.

植村みゆき・鈴木公基・桜井茂男(2003)中学生における時間的展望と自尊心との関連, 日本教育心理学会総会発表論文集, 45, 118.

山縣文治(1989)児童養護におけるリービング・ケア, ソーシャルワーク研究, 15(1), 44-50.

付記

調査にご協力いただきました施設, 学校の関係者の皆様, 子どもたちに感謝いたします。本研究は三菱財団の助成を受けた。